Research Monograph Series

疑いの喪失と近代合理主義のデリバティブ的増殖

科学主義的知的位相ロック、失われた現在、自己対象化の臨界

The Loss of Doubt and the Derivative Proliferation of Modern Rationalism:

Scientistic Intellectual Phase-Locking, the Lost Present, and the Critical Point of Self-Objectification

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Loss of Doubt and the Derivative Proliferation of Modern Rationalism: Scientistic Intellectual Phase-Locking, the Lost Present, and the Critical Point of Self-Objectification

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文は、デカルトとカント以後の近代合理主義を、単線的な思想史や科学主義の直接的起源としてではなく、個別具体的な不確実性、傷、疑いから生成された哲学的概念が、その生成条件から切り離され、一般抽象的形式として反復、制度化、自動化される「デリバティブ的増殖」として再構成する。

デカルトの方法的懐疑は、既存の知識を根底から疑うことによって確実性を求める実践であり、カントの批判哲学は、理性の能力と限界を理性自身によって吟味する試みであった。しかし、これらの哲学を生成した不確実性と自己批判が忘却され、思考する主体、客観的対象、普遍的理性、自律的個人という結果だけが抽象化されるとき、疑いと批判から生まれた合理性は、自らの対象化形式を疑うことのできない科学主義へ変質する。

本論文は、この状態を「科学主義的知的位相ロック」と定義する。それは、すべての人間が同じ結論を信じる状態ではなく、何を問題とし、何を証拠とし、何を合理的な問いとして認めるかという思考の位相が、共通の評価基準、制度、数値、アルゴリズムによって固定される状態である。異論が禁止されるのではなく、異論さえも同じ評価形式の内部でしか表現できなくなる。

さらに、過去のデータから未来を予測し、その予測によって現在を最適化する現代社会では、現在は自己と自己以外が接触して新しい差を生成する場ではなく、予測された未来への調整点となる。本論文は、この状態を「失われた現在」と呼ぶ。人工知能は、この近代合理主義の外部から到来した異物ではなく、言語、判断、知識、評価の対象化と自動化を徹底する一つの帰結として位置づけられる。

本論文の中心命題は次のとおりである。近代合理主義の臨界とは、世界を対象化した主体が、対象化そのものによって対象へ変えられた地点である。生成学は科学や理性を否定するのではなく、それらを生み出した傷、疑い、差、間、空を現在へ取り戻し、固定された知的位相を新しい接続可能性へ開く。

キーワード

生成学、近代合理主義、科学主義、知的位相ロック、概念デリバティブ、疑い、現在、自己対象化、人工知能、一般抽象的普遍性、個別具体的普遍性、自己外部化、傷、空、非

目次

Contents

0. 方法論的序論 1
1. 疑いを失った現在 2
2. デカルトにおける懐疑という傷 3
3. カントにおける批判と普遍化 4
4. 概念デリバティブと近代合理主義の増殖 5
5. 科学言語と科学主義 6
6. 科学主義的知的位相ロック 7
7. 言語デリバティブと擬似的多様性 8
8. 失われた現在 9
9. 人工知能と合理主義の自動化 10
10. 自己対象化の臨界 11
11. 生成学による転回 12
12. 芸術による位相のずれ 13
13. 生成学自身への再帰的批判 14
14. 結論 15
参考文献 16
方法論的声明 18

0. 方法論的序論

本論文は、デカルトやカントの哲学が現代の科学主義、アルゴリズム的統治、自己対象化を直接引き起こしたと主張するものではない。そのような単線的因果論は、思想を歴史的文脈から切り離し、一つの起源へ還元する点で、本稿が批判する対象化を反復することになる。

本稿が行うのは、思想史的因果関係の断定ではなく、構造的系譜の再構成である。すなわち、個別具体的な問題から生成された概念が、どのように生成源から切り離され、交換可能な形式となり、別の領域へ移転され、制度化されるかを検討する。

本稿における「デリバティブ」は、金融商品だけを意味しているのではない。それは、ある現実、経験、行為、概念から派生しながら、その生成源との直接的関係を弱め、別の対象、評価、予測との関係によって価値と意味を獲得する構造を意味する。

「位相ロック」は、物理学における同期現象から借用した概念である。ただし本稿は、社会や思考を物理的振動へ還元しない。知的位相ロックとは、複数の思考が完全に同一化することではなく、その差が一定の枠組みの内部に固定され、新しい問いを生成する位相のずれを失うことである。

また、本稿は科学批判と反科学を区別する。科学は、観察、測定、反証、再現、修正を可能にする不可欠な知的実践である。問題となる科学主義とは、科学的に対象化できるものだけに存在資格を認め、科学を成立させる歴史的、文化的、身体的条件そのものを問いの外へ置く態度である。

1. 疑いを失った現在

近代哲学は疑いから始まった。デカルトは既存の知識を疑い、カントは理性の能力と限界を批判した。ところが現代では、個々の科学的命題を疑うことはできても、何が科学的対象となり、何が証拠として数えられ、どのような問いが合理的と認められるのかという、対象化の枠組みそのものを疑うことが難しくなっている。

数値を疑えば、別の数値を提示することを求められる。評価を疑えば、より優れた評価基準を提示することを求められる。モデルを疑えば、より高精度なモデルを提示することを求められる。その結果、批判は対象化の外へ出る契機ではなく、既存システムの性能改善へと回収される。

ここで失われるのは、異論を述べる自由だけではない。問いが既存の対象形式へ回収される以前に、自己と自己以外の接触から立ち上がる「疑いの現在」である。

科学は本来、疑いによって自己を修正する。科学主義は、その科学を生成させる疑いを、科学的に形式化された疑いだけへ限定する。科学は命題を疑うが、科学主義は、命題を成立させる枠組みそのものへの疑いを排除する。

2. デカルトにおける懐疑という傷

デカルトの方法的懐疑は、単なる論理的技法ではない。それは、感覚、伝統、教育、既存の学問をそのまま信頼できないという不確実性に対して行われた、思考の自己切断であった。

すべてを疑う行為は、自己を安全な認識位置に置くものではない。むしろ自己が依拠してきた世界を失い、確実な基盤のない状態へ自らをさらす。その意味で、方法的懐疑は存在論的な傷を伴う自己外部化である。

コギトは、この傷から生まれた印として理解できる。疑われている内容がすべて偽であったとしても、疑っている出来事そのものが生じている限り、思考する自己の存在は否定できない。コギトは、初めから閉じた主体を宣言したのではなく、疑いによって世界との接続を失った自己が残した、最小限の印であった。

しかし、その生成過程が忘却され、コギトという結果だけが抽象化されると、思考する主体と、対象化される世界という分割が固定される。自己は世界の外部から認識する主体として、世界は測定、計算、操作される延長的対象として理解される。

ここで重要なのは、デカルトを単純な二元論の原因として非難することではない。問題は、デカルトの思考を生成した懐疑と不安が後景化され、「確実に認識する主体」という形式だけがデリバティブ化されたことである。

デカルトの懐疑は自己を傷つける思考であった。しかし近代合理主義は、その傷を忘却し、確実性という結果だけを継承した。

3. カントにおける批判と普遍化

カントの批判哲学も、理性を無制限に肯定するものではなかった。『純粋理性批判』の目的は、理性が何を知ることができ、どこで限界に達するかを、理性自身によって吟味することであった。批判とは、理性による理性の自己制限である。

また、カント倫理学は、道徳を外的権威や経験的欲望だけに基礎づけるのではなく、理性的存在者が自らに法を与える自律として構成した。この転回は、教会制度や啓示から独立した倫理の普遍性を可能にした。

しかし、カントの理性が完全に無歴史的な場所から生じたわけではない。道徳法則、義務、根源悪、最高善、目的の国といった構造には、キリスト教的、敬虔主義的な歴史世界との変成された連続性がある。

これは、カント倫理学を偽装されたキリスト教へ還元することではない。むしろ、個別具体的な宗教的、文化的普遍性が、一般抽象的な理性的普遍性へ位相変換されたことを意味する。

問題は、その変換後の形式が、自らを生成した歴史的、文化的基盤を忘れ、どこからも生成されていない純粋な普遍性として作動するときに生じる。理性批判から生まれた形式が、批判できない理性の基準へ変わるのである。

デカルトが疑いから確実な主体を生成し、カントが批判から普遍的理性を構成したとすれば、後世の近代合理主義は、疑いと批判を捨象し、主体と理性という結果だけを制度化した。

4. 概念デリバティブと近代合理主義の増殖

哲学的概念は、最初から抽象空間に存在するのではない。それは、哲学者が直面した不確実性、矛盾、宗教、政治、身体、死、時代的危機との接触から生まれる。概念は、思考が現実によって傷つけられたときに残す印である。

しかし、概念がそれを生成した問いと傷から切り離されると、別の概念を分類し、説明し、評価するための対象になる。生きられた問題から概念が生まれ、概念から体系が生まれ、体系から解釈が生まれ、解釈から研究と評価が生まれる。

本稿は、この状態を「**概念デリバティブ化**」と呼ぶ。

概念デリバティブとは、個別具体的な問いと傷から生成された概念が、その生成源との接続を弱め、他の概念、解釈、評価、将来的使用可能性との関係によって意味と価値を増殖させる状態である。

概念デリバティブ化そのものは否定されるべきではない。概念が元の状況を越えて移転されなければ、哲学的共有も批判も継承も成立しない。問題は、移転された概念が自らの派生性を忘れ、現実そのものに代わることである。

このとき哲学は、現在の傷から問いを生成するのではなく、既存の哲学的対象から次の哲学的対象を生成する。デカルト的、カント的、ヘーゲル的、ハイデガー的という分類は理解を助けるが、分類が完了したことで、現在の経験が何を新しく問うているかが忘れられることがある。

概念を理解することと、その概念を生み出した疑いを現在において生き直すことは同じではない。

5. 科学言語と科学主義

科学言語は、個別的な経験から、観察者の固有性、感情、場所、時間を可能な限り切り離し、比較、測定、検証、反復が可能な形式を生成する。この抽象化は、一般抽象的普遍性を成立させるために不可欠である。

しかし、科学言語も文化の外部から生まれるわけではない。何を研究対象とし、何を証拠とし、どのような手続きを妥当とし、どのような誤りを訂正すべきかという判断は、科学共同体の教育、倫理、信頼、制度、言語ゲームによって支えられている。

したがって、科学的普遍性は文化的普遍性の単純な反対ではない。一般抽象的普遍性は、個別具体的普遍性から差を抽出し、その差を場所と主体を越えて反復可能にする。

科学主義は、この生成順序を忘却する。一般抽象的形式が、個別具体的な身体、生活、文化、歴史から生成されたことを忘れ、自らを唯一の現実判定基準とする。

一人の痛みは、統計的に一般化される以前から、その人にとって現実である。科学は、その痛みを比較可能な知識へ変換するため、測定と検証を必要とする。しかし科学主義は、「まだ一般化できない」という方法論的留保を、「存在しない」「意味がない」という存在論的否定へ変えてしまう。

科学的証明は必要である。しかし証明は、出来事の後から到来する。証明が完了した時点で、最初に痛みが生じた現在は、すでに過去となっている。科学主義は、この時間差を忘れ、証明以前の現在に存在資格を与えない。

6. 科学主義的知的位相ロック

物理学における位相ロックでは、相互作用する複数の振動が、一定の位相関係を保つ。位相ロックは必ずしも完全な同一性を意味せず、一定の位相差を保った同期を含む。

生成学における知的位相ロックも、全員が同じ意見をもつ状態ではない。それは、異なる意見が存在していても、何を問い、何を証拠とし、何を合理的な説明として認めるかという思考の位相が固定される状態である。

科学主義的知的位相ロックにおいては、異論が禁止される必要はない。異論は、別の数値、別のモデル、別の評価として歓迎されることさえある。しかし、なぜ数値化するのか、なぜ評価するのか、なぜモデルに適合するものだけを現実として認めるのかという問いは、合理的な問いとして成立しにくい。

知的位相ロックの完成とは、異論が禁止されることではない。異論が、同じ位相の内部でしか表現できなくなることである。

批判が同じ形式によって評価され、改善案としてシステムへ回収されるとき、疑いもまたデリバティブ化される。疑いは既存の枠組みを開く力ではなく、枠組みの効率を高める情報になる。

ここでは、科学主義は科学の完成ではない。科学を生成してきた疑いと自己修正の差を停止させることである。

7. 言語デリバティブと擬似的多様性

言語デリバティブ化とは、言語を、それが生まれた身体、場所、他者、行為から切り離し、別の言語との関係、評価、引用、予測される反応によって再結合することである。

一つの出来事から、報道、要約、投稿、解説、批評、人工知能による生成文が派生する。それらは表面的には異なる多数の言語として現れる。しかし、同じ原情報、同じ評価基準、同じ生成モデルから派生しているなら、その一致は、独立した複数の証拠を意味しない。

言語量の増加は、生成源の多様性の増加と同一ではない。言葉が増えながら、言葉が生まれる個別具体的な位置が減少することがある。

この状態では、多数の言語が存在すること自体が社会的合意の証拠として受け取られる。派生した言語が互いを引用し、評価し、証明することで、現実接地を欠いたまま信頼が増幅される。

これは、言語デリバティブによる知的位相ロックである。表現の多様性が存在していても、その生成位相が同期しているため、0と1の間に新しい差を生み出す空が見えなくなる。

8. 失われた現在

現在とは、時間軸上の瞬間だけではない。それは、自己と自己以外が接触し、まだ既存の対象、言語、評価へ回収されていない差が生成される位である。

しかし現代の制度とアルゴリズムは、過去のデータから未来を予測し、その予測に基づいて現在の行動を最適化する。現在は、新しい生成が始まる場所ではなく、予測された未来へ適合するための調整点になる。

人間は、今何を感じているかよりも、将来どのように評価されるか、どの選択が最適と判定されるか、どの行動が成果へ結びつくかによって現在を決定する。過去から推定された未来が、現在より先に現在の意味を決める。

現代とは現在の時代でありながら、現在が存在できなくなった時代である。

現在に生じた傷や違和感が既存モデルに適合しない場合、それらは主観、例外、誤差、ノイズとして処理される。しかし生成学から見れば、既存モデルに納まらない差こそ、新しい問いと知を生成する可能性である。

失われた現在を取り戻すとは、科学的検証を放棄して即断することではない。それは、まだ証明されていない一回的な印を、存在しないものとして消去せず、将来の検証と新しい関係へ開かれた契機として保持することである。

9. 人工知能と合理主義の自動化

人工知能は、近代合理主義の外部から突然到来した異物ではない。それは、人間の言語、判断、知識、分類、評価を対象化し、計算可能な形式へ変換してきた歴史の延長上にある。

人工知能は、言語的な印を高次元の数値表現へ変換し、そこから統計的に整合的な出力を生成する。近年の潜在空間推論は、中間状態を逐次的な自然言語へ変換せずに処理し、一部の課題で複数の推論可能性を保持できることを示している。ただし、この方法がすべての推論領域で言語的推論を上回ることは確立されていない。

また、人工知能が提示する自然言語による説明は、内部計算そのものとは限らない。Chain-of-Thoughtが実際の判断要因を常に忠実に表すわけではないことも報告されている。したがって、人工知能の説明は、内部生成過程そのものではなく、人間の言語ゲームに適合するよう生成された二次的対象である可能性がある。

人間がAIの出力を複数の可能解の一つではなく、中立的で一般的な答えとして受け取るとき、人工知能は強力な位相同期信号になる。人間の言語からAI出力が生成され、その出力が日常言語へ戻り、将来の学習データとなる循環では、言語量が増加しながら生成源が収束する可能性がある。

しかし人工知能は、知的位相ロックを必然的に強化するだけの存在ではない。AIが複数の可能解を開き、人間がそれらを身体、場所、他者、責任のある言語ゲームへ再接地するなら、人間とAIは補完的関係を形成できる。

AIは多数の関係可能性を探索できる。人間は、そのうちの一つを不可逆的な行為として選び、その結果を生活として引き受ける。問題は、AIが考えることではなく、人間が判断と責任まで対象へ委託することである。

10. 自己対象化の臨界

世界を対象化する合理性が増殖すると、その合理性を用いていた自己自身も対象化される。

自己は、経歴、資格、所得、診断名、フォロワー数、生産性、信用、行動データとして表現される。そして人間は、その対象化された自己を改善し、管理し、社会的評価へ適合させる。

ここでは自己が対象を操作しているだけではない。自己は、自分について生成された対象に従って、自らを操作する対象になる。

自己外部化は本来、自己と自己以外との接触によって印を生成し、その接触を通して自己自身を変成する。しかし自己対象化では、自己から直接に印が生まれる代わりに、自己についての対象から次の対象が生成される。

この変化は漸進的に進む。一つ一つの数値化、委託、最適化は、小さく合理的な選択に見える。そのため、自己と現実のずれを知らせる痛みが徐々に弱まり、臨界への接近を感知できなくなる。

現代とは、傷が消えた時代ではない。傷と痛みの対応が切断された時代である。

近代合理主義の臨界とは、世界を対象化した主体が、対象化そのものによって対象へ変えられた地点である。

ただし臨界は、対象化が完全に閉じる終点ではない。生成の位相存在論に終対象は存在しない。臨界とは、表象が現実接地から離れながら、その表象によって現実と自己が再編成され、ずれを修正する痛覚的、文化的、倫理的フィードバックが機能しなくなる状態である。

11. 生成学による転回

生成学は、デカルト、カント、近代合理主義、科学、人工知能を否定しない。否定によって反合理主義を固定すれば、それもまた別の知的位相ロックとなる。

生成学が問うのは、ある概念や合理性が正しいか間違っているかだけではない。それが、どのような傷、疑い、切断、身体、文化、歴史から生成されたかを問う。

デカルトの確実性を反復するのではなく、デカルトを懐疑へ向かわせた傷を現在へ開く。カントの普遍形式を適用するだけでなく、カントが理性の限界を問わざるをえなかった差を現在へ接続する。

これは過去の思想へ復古することではない。概念を、その生成源であった傷へ再接地し、現在の接触によって変成することである。

生成学における「非」は、理性の消去ではない。理性が閉じた自己同一性からずれ、自己以外へ開かれる作用である。「空」は知識の欠如ではなく、既存の0と1へ確定されていない接続可能性である。「即」は自己と自己以外の差を消去する同一化ではなく、差を保ったまま相互に変成する現実接地である。

したがって生成学は、疑いを結論の不在としてではなく、新しい接続を生成する力として捉える。

12. 芸術による位相のずれ

知的位相ロックは、論理的反論だけによって解除できるとは限らない。論理的反論も、同じ評価形式の内部へ回収される可能性があるからである。

芸術は、別の正解を提示するのではなく、正解と誤りを分けている境界そのものに傷を刻む。作品は固定された思考の周期を中断し、それまでノイズとして排除されていた差を感知可能にする。

美学者母のグラフィティは、壁、都市、所有、規則、身体の関係へ線を刻み、既存の空間的、制度的位相をずらす。民宿狭山美学校は、生活と芸術、宿泊者と作者、私的空間と公共的空間、日常と非日常の固定的区分を傷つけ、その境界を可動的なインターフェイスとして維持する。

作品とは、自己の完成した意味を伝えるものではない。自己と自己以外のあいだに刻まれた傷であり、固定された知的位相に新しい差を生じさせる印である。

芸術は人々を別の一つの位相へ同期させるものではない。それぞれが異なる位置から自己外部化し、新しい接続を始められる空を開く。

13. 生成学自身への再帰的批判

生成学も、概念デリバティブ化と知的位相ロックから自由ではない。

「生成」「空」「非」「即」「印」「傷」「自己外部化」「言語デリバティブ」といった概念が固定され、現在の経験を分類するだけの体系となれば、生成学も対象から対象を生成する閉鎖的な概念空間になる。

生成学の公理は、最終的な真理を宣言するものではない。それは、概念間の整合性を検討し、他者による批判と修正を可能にするインターフェイスである。

生成学が生成学であり続けるためには、生成学自身が知的位相ロックとなる可能性を、その内部から疑わなければならない。

この自己批判は、理論の弱さではない。終対象を置かず、他者との接触によって理論自身が変成するという、生成の位相存在論の方法論的一貫性である。

14. 結論

本論文は、デカルトとカント以後の近代合理主義を、疑いと批判の単純な否定としてではなく、疑いと批判から生成された概念が、その生成源を忘却してデリバティブ的に増殖した構造として再構成した。

デカルトの方法的懐疑とカントの批判哲学は、固定された合理性ではなかった。それらは、それぞれの時代の不確実性と限界によって傷つけられた思考が、自己外部化した印であった。

しかし、その傷が忘れられ、思考する主体、客観的対象、普遍的理性という結果だけが制度化されると、合理性は自らの対象化形式を疑う力を失う。科学主義的知的位相ロックとは、この疑いの喪失が集合的、制度的、技術的に固定された状態である。

過去のデータから未来を予測し、その予測によって現在を最適化する社会では、現在は生成の場所ではなく、予測された未来への調整点になる。人工知能は、この合理性を自動化し、増幅しうる一方、複数の可能解を開く補完的インターフェイスにもなりうる。

決定的な問題は、人工知能の存在ではない。人間が判断、痛み、疑い、責任を対象へ委託し、対象化された自己に従って自らを管理することである。

近代合理主義の臨界とは、世界を対象化した主体が、対象化そのものによって対象へ変えられた地点である。

生成学は、理性や科学を否定しない。それらを生み出した傷と疑いを現在へ取り戻し、一般抽象的普遍性を、その基礎にある個別具体的普遍性へ再接地する。

哲学は傷から生まれる。しかし、傷から生まれた概念が傷を忘却するとき、哲学は知的位相ロックとなる。

生成学とは、概念を否定することではない。概念を生み出した傷を現在へ取り戻し、概念と現実のあいだに、再び差、間、空を開くことである。

参考文献

Descartes, René. 1984. The Philosophical Writings of Descartes. Volume 2. Translated by John Cottingham, Robert Stoothoff, and Dugald Murdoch. Cambridge University Press.

Foucault, Michel. 1977. Discipline and Punish: The Birth of the Prison. Translated by Alan Sheridan. Pantheon Books.

Habermas, Jürgen. 1971. Knowledge and Human Interests. Translated by Jeremy J. Shapiro. Beacon Press.

Hao, Shibo, et al. 2024. “Training Large Language Models to Reason in a Continuous Latent Space.” arXiv:2412.06769.

Heidegger, Martin. 1977. “The Question Concerning Technology.” In The Question Concerning Technology and Other Essays, translated by William Lovitt. Harper and Row.

Horkheimer, Max. 1947. Eclipse of Reason. Oxford University Press.

Husserl, Edmund. 1970. The Crisis of European Sciences and Transcendental Phenomenology. Translated by David Carr. Northwestern University Press.

Kant, Immanuel. 1998. Critique of Pure Reason. Translated and edited by Paul Guyer and Allen W. Wood. Cambridge University Press.

Kant, Immanuel. 2012. Groundwork of the Metaphysics of Morals. Revised edition. Translated and edited by Mary Gregor and Jens Timmermann. Cambridge University Press.

Kuhn, Thomas S. 2012. The Structure of Scientific Revolutions. 4th edition. University of Chicago Press.

Marcuse, Herbert. 1964. One-Dimensional Man. Beacon Press.

Pikovsky, Arkady, Michael Rosenblum, and Jürgen Kurths. 2001. Synchronization: A Universal Concept in Nonlinear Sciences. Cambridge University Press.

Tarantola, Albert. 2005. Inverse Problem Theory and Methods for Model Parameter Estimation. Society for Industrial and Applied Mathematics.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026a. “Axioms of Generative Topological Ontology: A Fundamental Theory of Existential Generation.” Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026b. “The Limits of Self-Externalization and the Generation of Being: Interface Ontology in Generative Topological Ontology.” Research Memorandum, Version 0.9.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026c. “Human-Precedence and Self-Precedence: An Ontology of Self-Proof in Generative Topological Ontology.” Research Memorandum.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026d. “The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination.” Research Memorandum, Version 1.0.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026e. “The Mark as Wound and the Critical Point of Self-Objectification: Generative Studies of Self-Externalization, Inverse Problems, Language Derivatives, and Artificial Intelligence.” Research Memorandum.

Turpin, Miles, Julian Michael, Ethan Perez, and Samuel R. Bowman. 2023. “Language Models Don’t Always Say What They Think: Unfaithful Explanations in Chain-of-Thought Prompting.” Advances in Neural Information Processing Systems 36.

Wittgenstein, Ludwig. 2009. Philosophical Investigations. 4th edition. Translated by G. E. M. Anscombe, P. M. S. Hacker, and Joachim Schulte. Wiley-Blackwell.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。